

# 異文化体験の影響に対する心理力動的接近の可能性

山本雅美

(2001年9月28日受理)

Some considerations on psychodynamic approach to impact of cross-cultural experience

Masami Yamamoto

Literature related to the impact of cross-cultural experience with Japanese samples was reviewed. It was aimed to suggest issues that need to be focused for exploration on how cross-cultural experience effects personality development. Importance of qualitative research, and examination on long-term effects were suggested.

Key Words: Cross-cultural experience, personality development, psychodynamics

キーワード：異文化体験、発達、心理力動

## 目 的

本稿は、日本人の「異文化体験者」に関するこれまでの研究を中心に概観し、「異文化体験」と個人の発達との関係を心理学的に探求していくための課題を検討することを目的とする。

ここで「異文化体験者」と呼ぶのは、さまざまな事情で母国（自文化）を離れ、それとは別の異文化で一定期間以上生活する経験を持つ人々である。具体的には「国際化」と言われる近年の時代的变化とともに増加してきた海外へ派遣される駐在員、留学生、技術協力者、研究者、その同伴家族などの一時的な異国での滞在者、移民など異国への永住者、中国帰国者であった。渡航目的は異なるが、これらの人々は人生周期のある時期に生活者として異文化に身を置くという経験を共有している。これらの人々に関するこれまでの研究から、このような経験が発達に及ぼす影響を検討していく上でこれまでどのような知見が得られているのか、検討する。

## 1. 異文化体験とは何か

文化とは、人が、特定の集団の成員となるため、生後獲得していく、多数の成員によって共有されている意味体系である。それは生活様式、行動様式、思考様式として人々の日常生活のすみずみに広く行きわたり、思考、感情、態度、価値観などに浸透している。文化は、人が特定の環境で成長する中で、ほとんど無意識

に学習されるものである。異文化体験は、特定の文化（自文化）の影響を受けた個人が、それとは別の文化と接触することである。

長年大都市で暮らした一家が地方都市へ移り住む場合、進歩的家庭で育った人と伝統的家庭で育った人が結婚生活を始める場合など、母国を離れなくとも「異文化体験」は生じ得る。ここで取り上げる異文化体験（母国を離れる場合）は、一般に異文化の程度、それとの遭遇における衝撃の強さが前者に比べてより著しいと考えられている。中根（1972）は両者の違いを、前者が基本的原理は同一の方言の違い、そして後者を文法の違いとして記述している。しかしいずれの場合も、その体験が個人に大きな心理的影響を及ぼし得ることは一般にも、また臨床的にも知られている（例えば文化間の移動、国内の転居や転校をきっかけとして生じる心理的危機や困難など）。阿部・宮本（1987）は両者を区別しないことが精神医学的には実践的としている。

本稿では、母国を離れる場合の異文化体験のみ取り上げる。しかし、両者がそれぞれ個人の発達に及ぼし得る影響の相違と類似を吟味していくことは、異文化体験と発達との関係を理解する上で重要な課題を含んでいると思われる。

## 2. 異文化体験の心理学的研究課題

さて、異文化体験はそれまで自明かつ有効であった意味体系が通用しなくなる世界と遭遇する事態である。

その衝撃は「カルチャー・ショック」や「根こぎ」といった点から指摘され、これまでも多くの関心が寄せられてきた。また他方では、異文化との接触が視野の広がり、自己や自国文化についての洞察の深まりを促し、成長の契機としてその肯定的な影響にも目が向けられるようになっていく。しかしいづれにしても、異文化体験とその結果の関係を単純に図式化することは、異文化体験者の実際の複雑な経験を反映するものではない。これまでに、その関係にはさまざまな要因が介在することが明らかになっている。さらに、異文化との出会いはその体験者に大きな影響を与え、その影響は体験の直後にとどまらず、その後の人生にわたってさまざまな形で影響力を持つと考えられる。しかし、異文化体験の結果を左右するとされる要因のどれが、どのような影響を与え、それがどのような変遷をたどるかについてはまだよくわかっていないことが多い。

異文化間の問題に関連する研究は、それが多種の領域にまたがる課題を含んでいるため、学際的に展開してきた。その中で、個人的なレベルのテーマは主に心理学がこれまでも貢献してきた。上記のような異文化体験の心理的影響の発生、その長期的な過程を捉えていく上でさらなる貢献が必要といえる。筆者は特に、臨床心理学の中の心理力動的な精神分析的観点からこの課題をとらえていくことに興味を持っている。

### 3. 異文化体験の衝撃

一般に、異文化体験によってどのようなことが起こり、それがどのような過程を経ると考えられているか、大まかな流れにそってまとめてみる。

#### ①自文化の喪失

異文化体験は、自文化を離れることから始まる。慣れ親しんだ文化を離れることは、住み慣れた土地、文化、国、それまでの対人関係、役割、社会的地位、言語などなど馴染みのある手がかり、それまでのよりどころを失うことである。渡航の目的や意欲にかかわらず、異文化体験には喪失が伴う。これらはすべて自分が時間的に連続しているという感覚、自分が何者であるのかという感覚を支えてきたものである。従って、異文化体験はそれまでに確立された自己の連続性の感覚、自己と環境の関係に断絶をもたらし、さまざまな程度で存在基盤を揺さぶるものと考えられる。

母国を離れて他国に居住することの心理的影響を心理検査(文章完成法)によって捉えた河合・藤縄(1980)は、未来や宇宙、独立に思いをはせる日本在住の国内群に比べて、母国を離れて海外に居住する在外群は現実的基盤に根づこうとし、家庭を守ろうとし、一見保

守的な傾向を有することを見いだした。この結果から、「一時的にせよ根づく大地を失い、根なし草になる」ことが「かなり基本的安定感を揺るがす」と指摘している。

精神障害を呈したとして強制送還された日本人留学生に関する島崎・高橋(1967 a)の報告は、このような事態が招く危機を劇的に表すものと言える。島崎・高橋によると、在留先で重症の精神分裂病やうつ病と診断された対象者は、自殺のおそれもあるとされるほど深刻な状態であったが、帰国後1~2日家族と過ごすことで状態が回復し、特に治療をすることのないままに元の地位に復帰していったという。家族を同伴した留学生には発症に至った例がなく、発症に至ったのはいづれも単身留学者であった。彼らの留学先でのhomeless状態が心理的孤独感を一層強め、問題の下地をつくったと考察された。

これらの研究は、自文化の喪失という異文化体験の側面が、根本的な次元で個人に衝撃を与え得ることを示唆する。これを精神分析的に捉えると、安全基盤としての母国を離れる経験は、乳児が母親が別個の人間であることに気づき、分離-一体化していく時の喪失体験になぞらえることができる。高橋(1983)は、異文化体験者のカルチャー・ショックの深刻さ、及びその重要な要素として、移行対象をなくし、突然母子分離の谷間に直面した時の乳児の経験に言及している。

#### ②異文化への適応

母国を離れた異文化体験者は、自文化の喪失と並行して異文化へ適応していくために、対処していかなければならない数々の現実面に直面する。生活の場となる異文化について多くを学習していかなければならない。その内容は単純な知識から、より複雑な文化的慣習に至るまで、多岐にわたる。行動面、認知面の対処にとどまらず、異文化に馴染もうとする努力が招く緊張感、役割期待や価値観の相違、文化差による衝撃、混乱、不快、適切に対処できない無力感など、感情面も揺さぶりを受ける可能性がある。それは全人格的なかわりを要求し、圧倒的な経験となり得る。

##### a) カルチャー・ショック

異文化と接触した時に違和感や被拒絶感が生じ、新しい文化に十分に適応できず、心身症状や精神症状が出現することはよく知られている。これらの反応は時間経過に伴って変化するが、この一連の現象はカルチャー・ショックと呼ばれるものである。これは本人と滞在国の人との間に支配・従属関係があってもなくても、また文化の主観的優劣にかかわらず生じる現象であり、文化の内容的差異が原因となる(阿部・宮本, 1987)。

不眠、いらいら、易疲労感などの精神身体症状、人

に会いたくない、自分がのけ者にされる感じなどの対人関係における症状などを文化間の移動に伴うストレスの指標として、それらがどの程度経験されるのか検討した調査研究がある。それらによると、何らかの適応困難を経験した者は約40% (稲永ら、1965; 高橋ら、1991) から90% (島崎ら、1967b) といった範囲が報告され、異文化体験者の多くが経験することが示されている。しかしこのようなストレスの感じ方、現れ方には個人差があると言えそうである。そして、文化間の移動に伴う何らかのストレスを経験しながらも、多くがやがて適応を果たしていくことが認められている (河合・藤縄、1980; 小林、1980; 田村、1986; 菱沼、1994)。

#### b) カルチャー・ショックの心理力動的理解

カルチャー・ショックと呼ばれる反応を心理力動的に捉え直していくと、それは表面的な文化差による戸惑いや不安にとどまるものではない可能性が浮かび上がってくる。異文化との接触が幼児期の分離-固体化の過程で経験する喪失を再体験させる可能性、そのことが個人に与える衝撃を先に指摘した。Kim (1976) は、「新しい文化を学習し、そこに適応していく過程はライフサイクルを再び始めるようなものである。それは誕生に始まり、各発達段階を経るという人生周期の縮小版である」と述べる。それまでのよりどころを失い、新奇な状況に自らを適応させていくために、持てる対処方略を総動員したり、新しいそれを捻出したり、さまざまな試行錯誤が行われる。その過程で変化を強いられ、改めて個人のパーソナリティのあり方が問い直されることもある。

異文化体験が人格の再検討を迫るため、これと心理療法及び、思春期の心理的発達の過程との類似を指摘するのは Ogura (1966) である。Ogura によれば、新環境下で自分を位置づけていくために、異文化体験者は元の自分から自ら距離を置き、新しい環境に合う自己概念を構成していくことが重要であるという。そのためには元の自分のいくらかを捨てなければならず、その挑戦は、心理的な柔軟性、弾力性、といったそれまでに築かれたパーソナリティの健康さが要求されるという。

このことは、異文化と接触し、異文化へ適応していく過程は、異文化に由来する衝撃のみを取り出して論ずることはできないことを示唆する。それは異文化との接触による文化的断絶だけでなく、その状況が特定の個人にとってどのような意味を持ち、それがどのように解釈され、どのような反応を生起するかにはその人の心理的発達、パーソナリティの成り立ちといった個人的要素がかかわるからである。異文化という環境

と、その環境に対処していく個人の相互作用によって成立する異文化体験を解する上で渡航の動機、異文化での生活、将来への影響といった一連の連続した流れとして捉えていく視点は、重要であると思われる。徳田 (1989) は、文化間の移動をきっかけとして生じた問題が、家族関係の変化に由来するものであった帰国子女の一例を報告している。文化間の移動に適応する過程において、いろいろな問題が生じる得る。異文化間葛藤という要素がより多くの比重を占める場合もあれば、異文化の影響をそれほど吸収しておらず、個人的要素がより比重を占める場合も考えられる。前者の場合も、異文化のどの要素に反応を生じるかといった選択性には個人的要素がかかわると考えられる。このように、文化間の移動に伴う個人の体験の過程を心理力動的に理解していくことはその衝撃と影響を考えていくための一つの視点として、有用と考えられるのである。

## 4. 異文化での適応が困難な時期

さて、異文化体験者が適応していく過程でさまざまな程度で困難を経験し、個人的な方法でそれに対処していくことを示した。しかし一般に、困難を経験しやすい時期に一定の傾向は見られるのだろうか。従来、異文化適応が初期の異文化との「ハネムーン期」に始まり、次第に不安や怒りが現れ、危機的状況を経て異文化への肯定的態度を獲得していくという過程を示す段階仮説や適応曲線が提唱されてきた。しかし実証的には批判や反証的な調査結果も提示されている。

日本人の異文化体験者について、最も困難を経験した時期を調査した結果によれば、それが渡航直後から3ヶ月とした研究 (稲永ら、1965)、半年以内とした研究 (島崎ら、1967b; 高橋ら、1991) がある。一方、心因反応による精神的な障害の発症の時期は幅広く存在していた (高橋、1990) など、そのような傾向を認めない調査結果も見られる。

中国帰国者及びその同伴家族の中で、帰国 (来日) 後何らかの問題を発症して精神科受診に至った17例について報告している江畑 (1993) は、その内の9名 (53%) が1年以内の受診者であることから移住早期を精神障害の多発期としている。さらに、早期には軽症の病態が、そして重症の病態はそれ以後に発症する傾向があると指摘している。

大学のカウンセリング・センターに来談した帰国学生に関する内田 (1994) の調査研究も同様の傾向を示唆する。内田は来談者を「健康的な範囲」、「神経症的」、「より重症」の3群に分けている。そして入学後3ヶ

月以内という早期に来談したのは、「健康的な範囲」の人々であったという。彼らの訴えや本人の苦悩は深刻であるが、彼らはどのような状況と経過で現状に至ったかを言語化でき、その中で自分で何が問題かをつかんでいくことができ、渡航前、在留中を通じて苦勞はあっても大きな適応上の問題はなく、親との関係でも葛藤やずれを修正できる関係を有していた。それに対して、「神経症的」な人は帰国後1年以上経ってからの来談者に多く、訴えも日本への再適応の問題でない場合が多かったという。また「より重症な人」の来談の時期は一定ではないが訴えや親子関係の問題がより深刻であったと述べている。

これらの結果は相談機関を訪れた人々を対象としているが、困難を経験しやすい時期には個人差のあること、文化差に衝撃を受け、それをストレスとして早い時期に感じる事が一つの健康さの指標である可能性を示すと言える。内田の例にあるように、文化間の移動の後比較的早期に文化差の衝撃を感じることは、以前の経験が自分の一部として取り込まれ、身にしていることを意味している。そのために文化間の移動の以前と以後の経験をどのように調整していけばいいのか模索する必要が生じる。もともと対人関係に不安を抱えている場合、環境に十分関与しないまま問題を温存したり、その逆により大きな混乱を招いたりする可能性があると考えられる。適応の初期に文化差の衝撃をそれとして経験することは、カルチャー・ショックの発達の意義を示唆すると言える。

衝撃をそれとして経験し、情緒的に反応する意義については、伊藤(1980)が示唆的である。伊藤は、小学生の帰国子女を対象に滞在国内を離れ、帰国するという移動に伴う抑うつ的な感情について調査している。そして、帰国の決定を聞いて友達と別れるなどの別離を「悲しい」と十分に感じた子どもは、漠然とした不安や何も感じなかった子どもに比べて、帰国後の生活を積極的に生きようとしていることを見いだした。「悲しい」という感情体験は帰国する現実を受け入れ、気持ちの整理をつけていくことと関連している。このような作業によって別離を乗り越え、現在の生活に積極的に関与していけると考察している。一方、漠然とした不安、何も感じないと答えた子どもがいたことは、別離を巡る感情体験の複雑さを示すものである。

## 5. 成人と子どもの異文化体験

### ①成人の異文化体験

一般に、年齢が高くなるほどパーソナリティができあがっており、自国の思考パターンが身に付いている

ため、異文化との出会いにおいて弾力性を欠き、より強い程度のカルチャー・ショックを経験すると言われる。箕浦(1984)は、異文化体験の特質が、認知、行動、情動を左右する文化的意味の3つのレベルがずれることにあるとしている。箕浦は対人関係行動に注目し、その文化的意味の感受期が9~14.5歳であることを見いだしている。そして、感受期を過ぎた成人の場合、異文化で認知、行動、情動に乖離が生じやすいとしている。これは文化差を知識として認知していても、それを感情的に受け入れたり、実際にその異文化に即した行動をとることができないことを意味する。このことは成人に、より強度なカルチャー・ショックが生じやすいことと関連する。

しかし、異文化体験に対する反応と、それが発達に及ぼす影響は区別して捉える必要がある。異文化体験の衝撃が強くとも、成人は子どもよりも後の発達課題を達成し、経験を積んでいるため、子どもよりも異文化体験の衝撃に対処する能力を備えている可能性が高い。例えば愛着の対象からの分離の体験に対して、成人は子どもよりも適切に対処できると考えられる。このことは異文化体験が成人の発達に影響を及ぼす可能性を否定するものではない。異文化体験の影響は、表面的な行動にとどまらず、その認知、感情の次元にも目を向け、それを捉えていかなければならない。

### ②子どもの異文化体験

一般に、子どもの異文化への適応能力が大人と比べて高いとされるのは先述の通りである。感受期以前の異文化体験では、滞在期間が長くなると異文化(親にとっての)で形成された意味空間が自文化となって機能しだす可能性もあるという(箕浦, 1984)。江畑ら(1996b)も、異文化の受容について、成人期の人よりも思春期前期から中期の人の進行が速やかであったと指摘している。しかしこれは逆にその後の帰国後の生活や、自身の出自との関連で困難を生むことにもなり得る。

子どもが異文化の生活にとけ込んでいくと、より深く異文化の影響を受けた子どもと、まだその特定の異文化に慣れない親との間に葛藤を引き起こすことがある。また子どもの場合、多くは親の事情による、自らの意志とはかかわりのない渡航を強いられることが多く、このような経験が発達的に、特に長期的にどのような意味を持つのか捉えていく視点も必要であろう。

子どもの適応は、両親が文化間の移動によるストレスをどの程度対処でき、子どもの保護的役割をどの程度担えるかという要因に大きく左右される可能性がある。海外在住の母子間に精神的健康状態の相関を見いだした Ishizaki and Ishizaki (2001) は、国内ではこ

のような相関は見られないことから、海外では日本人母子は地域から孤立しやすく、頼れる友人、親戚も少ない。また父親は仕事に忙しく、母子間の相互作用が増し、双方が影響を与えやすくなるのではないかと指摘する。移住者にとって家族の影響が増すという可能性は、海外に居住する中学・高校生にとって、生活場所が不安定なため、家族が唯一の安定したユニットとなり、両親や兄弟の役割の評価が国内群のそれとは異なるという西(1993)の指摘からも推察される。

文化間を移動する経験は、子どもの発達課題の順序にも影響を及ぼす。渋谷(1993)は、「児童期に二つの異なった文化及び言語を身につけると単一の文化には適応できない部分があることに早くから気づかされ」、これが青年期のアイデンティティ形成の課題とかかわる自分の「独自性」を意識し始めることを思春期よりも前に取り組む事態を招くことがあると指摘する。

柏木(1990)も、子どもの発達に関する比較文化的研究の成果として、文化を越えて共通のものも多いが、文化が違えば子どもがいつどのようになっていくかという時期的な違いにとどまらず、どのような社会・文化で生まれ育つかによって質的な違いのあることが明らかになっていると述べている。そして、海外から帰国してくる児童・生徒の難しさとして、日本語や教科の遅れといった目に見える課題は対策も立てやすいが、それぞれの学校なり環境で身につけてきたはっきりと書かれていない規範、例えばどういう風に行動するのがいいのか奨励されてきた行動規範が、帰国後の環境の行動規範と違っていることから生じる経験、つまり今まで良いと思ってやっていたことが変に思われたり目立ったり、排斥されたり疎まれたりし、居心地の悪さを感じるようになったりする問題の大きさを指摘している。

発達段階のどの時期に異文化と接触するかによって、その経験が持つ影響力は大きく異なると考えられる。特に児童期の子どもにとって、家族の影響や、環境への適応が速やかに進行するとしても、思春期・青年期に達していることが前提とされる喪失経験の悲哀や、アイデンティティの形成にかかわる体験は、長期的にどのような影響を及ぼし、それがどのような過程を経ていくのか注目される。

## 6. 異文化体験の長期的影響

異文化体験の影響、そしてその体験と発達の間を捉えていくためには、その体験の影響を長期的に検討する必要がある。

異文化での一時的な滞在から帰国した人々を対象と

した研究は、異文化体験の渦中ではなく、その体験の長期的影響を視野に入れた研究として位置づけることができる。まず、心理検査などの質問紙調査によって異文化体験者の精神的健康を捉えようとした研究がある。例えば人格の発達段階の一時期を海外で暮らした学生は、そうした体験のない学生と比べて、不適応反応を生じやすいという仮説への弱い支持を得ている佐藤ら(1987)である。しかしその反対に、帰国中学生の自己肯定感が一般の中学生よりも高い可能性を示唆する松原・斎藤(1985)や、海外生活経験のある高校生の方がその経験のない高校生よりも精神身体面の自覚症状が少ない(菱沼、1995)といった調査結果も見られる。

帰国者について大塚(1992)は、海外での異文化体験の意味や自分自身への影響は帰国後に初めてわかることが多いと述べ、帰国後を「心の統合作業」の時期と呼ぶ。表面には現れなくても、外国生活で出会った異文化の影響を少なくとも幾分かは受けているため、ほとんどの人がなにがしかの不適応感(違和感)を感じる。自分はどうしたいのか、自分を知り、自分の価値観を見つけ、自分を作るこの時期を通して、さまざまな人々との関係の中で、両方の価値観の間で揺れ動き、時間をかけて自分にとってバランスの取れたところはどこなのかを探していくことが必要である、という。

このような過程に注目しているものとしては箕浦(1988、1994)、原(1993、1998)、森吉(1999)がある。いずれも成人期以前の異文化体験者を対象としている。箕浦は、10年間の追跡調査の対象者すべてが帰国後周囲とかみ合わないことからくる居心地の悪さを経験していたわけではなかったが、可視的で比較的対処しやすい表面的な違いに対応することが手一杯な時期を過ぎると、本質的な違いが意識され出し、その転機が2年半から3年経過したあたりであることを見いだした。それはまず、自分が育った文化で身につけた文化的要素(ものの感じ方、考え方)が日本のそれと異なるという事実認識として捉えられ、それが外見と食い違っていることから生じる自己認識と他者認識のずれ、またそれが国籍と違っていることから自分の中にも自己認識のずれが生じるといった葛藤として示されている。このような本質的な違いにどのように対処していくかは年齢、パーソナリティ、帰国後の環境の影響を受け、異文化体験の帰国後の消長は「一方では在外地の意味空間にどれだけ深く自己を投入していたか、他方では親などを通じて日本の意味空間への馴染みが在外中にどの程度培われているかに規定される」と述べている。森吉は、時間の経過とともに摩擦がなくなるわけで

はなく、帰国生が常に新たな課題に直面すること、それに対する周囲の帰国生への期待との乖離が生み出す問題を指摘している。そして、新たな葛藤を経験することを、より適応力の高い自己を作り上げていく長期的で多方向的な過程として捉える必要性に言及している。

原は、第二次大戦下の帰国子女学級の卒業生を対象としており、帰国後の年数は半世紀以上にも及ぶ長期の影響を捉えたものである。自己定義を巡る複雑さ、性格形成に見られた特徴を描き出している。これらの研究はいずれも、個人と環境の相互作用の中で、表面には現れない、「心の統合作業」が非常に長期間にわたることを示している。

異文化体験による困難を指摘する研究は圧倒的に多く、実際困難を伴うと言えそうである。しかし異文化体験者が自らの異文化体験を振り返り、それを肯定的に評価するという報告も少なくない(菱沼、1995; 中西ら、1999)。誰にとっても、自らの確かな経験の一つ一つは、その内容がどのようなものであれ、自分であることの間接的成り立たせるかけがいのないものである。異文化体験者の経験を通して見えてくるものの一つは、こうした自らの経験を自覚的、意識的に捉え、それを自分の一部として取り入れ、意味づけていくことの可能性といえるかもしれない。

## 要 約

日本人の異文化体験者に関するこれまでの研究を概観し、異文化体験の影響を考えていく上で、心理力動的、長期的な影響を捉えていくことの有用性を示した。

## 引用文献

- 阿部裕・宮本忠雄 1987 精神医学的見地からみた文化摩擦 臨床精神医学 16(10), 1375 - 1382.
- 江畑敬介・曾文星 1996 中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ(第6報) - 3年間の文化受容過程 - 日本社会精神医学会雑誌 5(1), 48 - 61.
- 江畑敬介 1993 移住のインパクトと病態変遷 - 中国帰国者の場合 - 臨床精神医学 22(2), 167 - 172.
- 原和子 1993 異文化体験のライフコース分析 - 「かつての帰国子女」の追跡研究 - 第一部報告 教育研究 35, 155 - 172.
- 原和子 1998 異文化体験のライフコース分析 - 「かつての帰国子女」の追跡研究 - 第二部報告 教育研究 40, 195 - 232.
- 菱沼洋子 1994 海外帰国高校生の精神保険に関する研究 - 同一性形成と適応をめぐる - 日本社会精神医学会雑誌 3(2), 96 - 108.
- 稲永和豊・土屋直裕・長谷川和夫・近藤喬一 1965 米国における日本留学生の生活適応 - 精神医学的立場よりの考察 - 精神医学 7(5), 413 - 418.
- Ishizaki, Y. & Ishizaki, I., 2001 Psychosocial association of Japanese mothers and their children when living temporarily abroad. *School Psychology International*, 22(1), 29-42.
- 伊藤賀永 1980 帰国子女の精神衛生 季刊・精神療法 6(4), 39 - 47.
- 柏木恵子 1990 発達心理学の視点 中西晃・西村俊一(編) 国際教育の創造 創友社 pp. 229 - 254.
- 河合隼雄・藤縄真理子 1980 在外日本人の適応・不適応についての臨床心理学的調査 現代のエスプリ 161: カルチャー・ショック 星野命(編) 至文堂, 102 - 119.
- Kim, H. A., 1976 Transplantation of Psychiatrists from Foreign Cultures. *Journal of American Academy of Psychoanalysis*, 4(1), 105-112.
- 小林哲也 1980 海外帰国子女の適応 現代のエスプリ 161: カルチャー・ショック 星野命(編) 至文堂 83 - 101.
- 松原達哉・斉藤浩史 1985 帰国中学生の自己概念および不安傾向 海外子女教育センター研究紀要 3, 25 - 37.
- 箕浦康子 1984 子供の異文化体験 思索社。
- 箕浦康子 1988 日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程 - 帰国者への象徴的相互作用論アプローチ - 社会心理学研究 3(2), 3 - 11.
- 箕浦康子 1994 異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ 教育学研究 61(3), 9 - 17.
- 森吉直子 1999 Developing the Third Eye: 適応とは何か - 第三の視座の萌芽 - 帰国生の事例から 海外子女教育センター研究紀要 10, 31 - 49.
- 中根千枝 1972 適応の条件 講談社。
- 西恵子 1993 アメリカ滞在が少年期のアイデンティティに及ぼす影響についての一考察 海外子女教育センター研究紀要 7, 1 - 13.
- Ogura, K., 1966 Foreign doctors in the United States. *Mental Hygiene*, 50(3), 446-451.
- 大塚芳子 1992 帰国直後の不適応 臨床心理学大系第10巻 安香宏・小川捷之・空井健三(編) 金子書房 pp. 139 - 152.
- 佐藤美刈・島悟・岸良範・中西悦子・細井八重子 1987 「帰国子女における精神医学的諸問題の研究(そ

- の1)(その2): 本学における実態調査の知見から」、  
第9回大学精神衛生研究会報告書、187-198.
- 渋沢田鶴子 1993 異文化とアイデンティティ-帰国  
子女の症例をとおして- 精神分析研究 37(1)、114-  
120.
- 島崎敏樹・高橋良 1967 a 海外留学生の精神医学的問  
題(その1)-留学中の精神障害例ことに精神分裂  
病とうつ病について- 精神医学 9(8)、565-571.
- 島崎敏樹・高橋良 1967 b 海外留学生の精神医学的問  
題(その2)-A.F.S. 交換高校生の滞米中の自  
覚症状- 精神医学 9(9)、669-672.
- 高橋進・鳴戸弘・松岡洋一・関育子・渡辺啓子・小原  
博・石川俊男 1990 海外派遣邦人の心身医学的研  
究(第1報)-その疾病形態の検討- 心身医学  
30(6)、524-530.
- 高橋進・鳴戸弘・松岡洋一・関育子・石川俊男 1991  
海外派遣邦人の心身医学的研究(第2報)-男性  
を対象とした帰国時アンケート調査と赴任前 TPI テ  
スト- 心身医学 31(5)、360-366.
- 高橋哲朗 1983 文化葛藤と病い 精神の科学8・治  
療と文化 岩波書店 pp.209-236.
- 徳田克己 1998 幼稚園・小学校において不適応症状  
を示した帰国子女A君の適応過程 桐花教育研究所  
研究紀要 10、89-91.
- 内田奈保子 1994 帰国学生の訴える問題と問題と海  
外生活経験の意味について-大学のカウンセリング  
センターの現場から- 心理臨床 7(2)、73-78.